



【書評】

安田喜憲著『環境文明論 — 新たな世界史像』

(論創社 2016.3刊 4,800円+税)

安孫子昭二

Book Review

Shouji ABIKO

古稀を迎えた著者が古巣の東北大学から大学院環境科学研究科教授として招聘され、4日間にわたり「環境文明論」のテーマで集中講義を行った。その講義録がA5判で647頁の膨大な一冊となった。

1988年に著者は、哲学の泰斗梅原猛氏の呼びかけに応じて国際日本文化研究センターの創設に加わり、日中共同学術調査を組織して、長江中下流域に萌芽した6,300年前の稲作漁撈民による長江文明を発見したのを手はじめとして、世界の各地に足をはこんで文明の盛衰をつぶさに観察してきた。本書は、著者のエネルギッシュな活動の記録と研究成果を総括するとともに、現代文明が近未来に崩壊する危機にあることを予測した警世の書でもある。

著者は末尾で本書を、「O. シュペングラーの『西欧の没落』やA. トインビーの『歴史の研究』に匹敵する、いやそれ以上に価値のある本であると自分では思っている」と豪語する。一読して、確かに、現代文明が崩壊の危機を回避するためにも、世界各国で「新たな文明の未来を指し示す本」として読まれてしかるべき哲学書といえる。本書の構成は次のようである。

- ・第1章 環境文明論とは
- ・第2章 環境文明論の最新の方法－年縞の発見
- ・第3章 照葉樹林論と農耕起源論
- ・第4章 稲作漁撈文明論－長江文明の発見
- ・第5章 気候環境文明論
- ・第6章 森林環境文明論
- ・第7章 動物環境文明論
- ・第8章 環境生命文明論

環境考古学の提唱

本書を紹介する前に、安田喜憲氏には最初の著作として『環境考古学事始－日本列島2万年』（1980）があるのでふれておこう。著者は、東北大学大学院理学部で自然科学の花粉分析を専攻しながら人文科学の考古学にも目配りし、自然環境の変遷と人類の文化・生活の変化を研究する総合科学としての「環境考古学」を標榜していた。研究の手法として、過去の具体的な主体（人間）と環境との相互作用を復元し、その上に立って実証的な人類史の法則性を究明しようとしていた。

『環境考古学事始』の柱となるのは、広島大学助手のときに花粉分析担当として参加した福井県鳥浜貝塚の発掘調査の成果である。とくに1万2,000年前以降の周辺の森の変化を、ブナ林の時代→ナラ林の時代→照葉樹林の時代→スギ林の時代ととらえ、森と文化要素の密接なかわりを指摘している。

このとき著者は日本と韓国の調査を手がけたのみであったから、温帯地帯とは全く異なった風土をもつ森の少ない乾燥地帯や熱帯地域、あるいはインド、中国などの古代文明を明らかにし、その上に立ってもう一度日本列島における自然と人間とのかかわりの姿を見なおす必要があるとむすんでいた。

第1章 環境文明論とは

本書の全体を貫く、著者の思想体系の概要である。

人類文明史には、「超越的秩序」を重視する

文明と「現世的秩序」を重視する文明のふたつがあるという。中国の場合、黄河流域の人々（漢民族）の人々は「超越的秩序」を、長江流域の人々（三苗族）は「現世的秩序」の文明を発展させた。

超越的秩序とは、ありのままの自然を嫌い、自然を加工し、自然には存在しない幻想を複合・融合させた文明を誕生させ、牽引してきた「畑作遊牧民」のことで、彼らは、麦やアワを栽培してパンを食べ、ヒツジやヤギを飼ってミルクを飲み、バターやチーズをつくり、肉食するライフサイクルである。

現世的秩序とは、自然界には存在しない生命体を幻想したり、創造、加工することを禁じて、自然界に存在するあるがままの生命体を受け入れてきた「稲作漁撈民」のことで、彼らの暮らしは、コメと魚を食べるライフサイクルである。

これまでの文明史観では、現世的秩序を崇拝する人々は未開・野蛮であり、抽象的な思考や複合的な思考をもたないために、文明を発展させることができなかつたと見なされてきた。現代の世界を支配しているアメリカ文明を発展させたのは自由と民主主義であり、いま世界を席卷しているグローバル・スタンダードといわれる市場原理主義も超越的秩序の産物であり、身近な例として、実態をとまわらないバーチャルな虚構の上に立ったサブプライム・ローン問題がある。キリスト教やイスラム教も超越的な宗教といえる。

敬虔なキリスト教徒でもあったカール・ヤスパースは、この超越的秩序をもつもののみを文明とみなし、ギリシャ哲学に立脚したギリシャ文明、キリスト教に立脚したイスラエル文明、仏教に立脚したインド文明、そして儒教に立脚した中国文明を「枢軸文明」と呼んだ。

しかし、ヤスパースのいう枢軸文明以前は、旧石器時代からすべて人類は現世的秩序の世界に生きてきた。地中海世界においても大地母神を崇拝するアミニズムの世界、多神教の世界が普遍的であった。日本の縄文文化もまた現世的秩序を大事にしてきた。それが神道に受けつがれてきたのである。

著者は、ユダヤ・キリスト教に代表される超

越的秩序の思想は砂漠の風土で誕生したという。砂漠は人間以外に命のない世界で、夜ともなれば星との対話の中で空想の世界にひたり、幻想の世界、妄想の世界を造り上げねばならなかった。これが超越的秩序を生みだす原動力になったという。砂漠の民は、自らが作りだした自分が正しいと信じる世界観で、反抗するものの命を奪うことさえ辞さない、力づくで一神教を広めていったのである。

畑作牧畜民の思想は、農耕地を拡大すれば生産性が上がる生業形態である。森を破壊して農耕地を拡大し、ヒツジの頭数を増やしていった。そういう社会では個人主義が台頭してくる。豊かさを求めて他の民族を支配していく覇権主義的な「力と闘争の文明」を生んできた。現世的秩序を大切にしてきた国々はいつも超越的秩序の文明に支配され、蹂躪されてきたのである。キリスト教の布教を名目に、金が欲しいスペイン人は中南米のマヤ文明やインカ文明を侵略したし、石油が欲しいアメリカは自、由と民主主義をもたないイラクを悪の枢軸国と呼んで攻撃した。

これに対して現世的秩序は、森の中に生きた人々が日常的に他者との命のやり取りの中で獲得した常識である。死は新たな生命を生みだすための喜びであり、命の連鎖を紡ぐ生命文明であったという。

現世的秩序の人々は、米やトウモロコシ、ジャガイモを栽培するにあたり、水の循環を維持するために水源涵養林の森を守る必要があった。日本の棚田もアンデスの棚畠も、完璧な水の循環システムをもとに作りあげられている。稲作農耕社会は限られた耕地をいかに集約的に利用し、いかに土地の生産性を上げるかが重要である。そのためには共同体の中で、人間相互のコミュニティをきちんと作っていかなければその社会は維持できないのである。

2030年には人口の急増に反比例してエネルギー不足、食料不足、とりわけ水不足により、人類は大きな危機に直面する可能性が高い。また、このままいけば地球の温暖化が急速に進んで生物の多様性が失われよう。さらに、今世紀

中に気温が最大で4.8℃上がると予測されるので、現代文明は崩壊し灼熱地獄の中で人類も絶滅する危機に直面する。

この20年、50年先のさしせまった危機的状況に対処するために、科学者は英知を結集しなければならないが、そのための国家予算は投入されていないのである。

「我々はテロと闘う」という勇ましいヨーロッパ人の言葉に、「目には目を、歯には歯を」というメソポタミア文明以来の「血で血を洗い流す畑作牧畜民の文明の原理」を感じるが、この西洋文明の栄華を作りだした文明の原理は行き詰まっているのではないだろうか。

東洋にはそれとはまったく異質の文明の原理がある。それは日本の縄文文化である。縄文時代は、人と人が集団で殺しあう戦争のない平和な時代が1万3,000年も続いたのである。

だが、明治になって欧州列強の侵略に対抗するために西洋文明を受け入れ、欧米文明の申し子としての道をひたすら歩んできた。その結末が第2次世界大戦の敗戦というみじめな結末となった。力を力でねじふせようとする文明および原理は、日本には合わないのである。

「文明を発展させた要因は、文明衰亡の要因ともなる」。そして、「いかなる文明にも死が訪れる」。2011年3月11日に東北地方を襲った東日本大震災と福島原子力発電所の事故は、市場原理主義に立脚した自然支配の文明原理の脆弱性をさらけだした。

著者は、この文明の危機を超克するには母なる自然・風土との関係の中で、歴史を再構築し、未来を予測することが肝要という。その歴史を検証するためには、年代を比較する物差しとなる基準が必要である。これまでは14Cを測定して絶対年代値とされてきたが、過去にC濃度が大きく変動していることがわかり、その変動値を年輪年代や大陸氷床、年縞で暦年補正してきた。それとても誤差がついてまわった。著者はこの変動が気候変動の影響を受けたためと主張したが、誰からも信用されなかったという。

そうした批判に苦悩する中で、著者は福井県水月湖で5万年以上もの歴史が蓄積された「年

縞」の存在を自らの手で発見したのである。

第2章 環境文明論の最新の方法—年縞の発見

環境文明論のキーワードとなるのは、著者がアジアで初めて発見し命名した水月湖の「年縞(ねんこう)」である。鳥浜貝塚の調査のとき、隣の水月湖の湖底をボーリング調査して32.2mのコアを採取、花粉分析により過去5万年の環境史を明らかにした。水月湖は周囲が山に囲まれた水深の深いすり鉢状をした湖で、湖底には夏季の珪藻やプランクトンの遺骸、冬季の落葉や洪水で流れ込んだ粘土鉱物や有機物、大気中のダストなどの土層が、あたかも木の年輪のように縞状に堆積していた。

水月湖の年縞研究は、弟子の北川浩之氏そして中川毅氏にプロジェクトが引き継がれ、2012年7月13日に、水月湖の「年縞」が世界の過去5万2,800年の標準時計に認定されるに至ったのである(中川『時を刻む湖』2015)。こうして1万2,250年前までだった樹輪年代によるAMS測定値の較正が、水月湖の年縞研究により5万年以上前まで精緻に較正できるようになったのである。

例えば、AD926年に渤海が滅亡する。突然滅亡したのは、白頭山(中国吉林省と北朝鮮两江道の国境地帯にある火山)の大噴火によるもので、「東洋のポンペイか」と言われていた。ところが、青森県小川原湖の年縞分析したところ、白頭山の噴火は渤海滅亡の11年後であることがわかった。滅亡の引き金になったのはむしろAD915(延喜15)年の十和田カルデラ大噴火であって、気候が冷涼化したための影響ではなかったかという。

第3章 照葉樹林論と農耕起源論

ユーラシア大陸の東西に、著者が「東亜稲作半月弧」と「西亜麦作半月弧」と呼んだ肥沃な三日月地帯がある。前者は、長江中下流域が暖温帯系のカシヤシイ、タブノキ、クスノキ等の照葉樹林文化のセンターであり、稲作漁撈が長江文明をはぐくんだという。後者は、チグリス・ユーフラテス川流域を中心とする乾燥に強いコ

クシフェラガシ、オリーブ、コルクガシ等の硬葉樹林文化であり、畑作牧畜がメソポタミア文明をはぐくんだという。この両文明が東洋、西洋の文明発展の源流となったのである。

照葉樹林文化の稲作と硬葉樹林文化の麦作の決定的な違いは、稲作農耕民はコメを食べ、タンパク質を魚介類から摂取し、味噌や醤油の発酵食品を開発したのに対し、麦作農耕民はパンを食べ、ヒツジやヤギを飼ってミルクを飲み、バターやチーズを作り、肉を食べることによってタンパク質を摂取したことである。

このライフスタイルの相違が、地球環境とりわけ森林に対して大きな影響をもたらすことになった。ヒツジやヤギの家畜を飼う畑作牧畜民のライフスタイルは、地球上の森という森を食い尽くし、森・里・海の水の循環系を破壊し尽くしてきた。一方の稲作漁撈民はというと、森を守り、森・里・海の水の循環系を守る持続型のライフスタイルを確立してきた。

第4章 稲作漁撈文明論—長江文明の発見

著者は、専門の花粉分析を通して自然環境の変化をよみとってきた。とくに温暖期と寒冷期の植生の変化により食糧獲得の持続が困難になったときに、危機をのりこえるためにイネとムギの利用が始まったという。また、気候変動が世界各地の古代文明が崩壊する要因にもなったことを実証的に論じている。

故中尾佐助は、中国雲南省がイネ栽培の起源地であるとし、照葉樹林文化のセンターと呼んだ。著者は、雲南省は高原地帯なので冷涼気候、イネの生育には適さないから起源地にはなりえない。雲南省にイネの種類が多く栽培法が完成されているのは、後世に稲作技術が持ち込まれたからだという。

その著者がイネ栽培の起源地と目するのは、長江中流域の湖南省洞底湖周辺である。洞底湖周辺には旧石器時代の遺跡が多く人口圧が高かったことと、1万5,000年前以降の地球の急激な温暖化により、乾燥した草原に住む大型哺乳動物が草原の湿潤化と森の拡大により姿を消し、ヨモギ属やイネ科植物の生える環境にか

わっていった。そうした所に野生イネが生育地を拡大してきたことから、食料危機に直面していた旧石器時代人が野生イネに着目して利用したことが、イネの栽培化につながったとみている。

1994年に著者は、湖南省城頭山遺跡を発掘調査し、6,300年前にさかのぼる径360mの円形城壁をもつ都市型集落を発見する。5,000年前の最盛期にこの集落が擁した人口を2,000人と見ている。

著者は、雲南省エルハイ湖の湖底堆積物を花粉分析して、長江流域では6,300年前に気候の冷涼乾燥化が始まっていて、洞底湖の湖面が低下して水田に適した広大な低湿地が出現したことをつきとめる。そこで、稲作に必要な灌漑用水を確保するために多くの人力による共同作業が必要となり、作業を統率するリーダーの出現も必要となって、稲作漁撈民による都市型集落が出現したと見るのである。イネはすべてジャポニカ米であった。

これに対して西アジアで発祥した麦作の方は、気候の冷涼化・乾燥化がもたらしたものである。周辺の草原地帯でヒツジやヤギを飼って暮らしていた人々が、冷涼化・乾燥したことにより、水を求めてチグリス・ユーフラテス川やナイル川沿いに集まって来るようになり、人口が集中したことが麦作と牧畜がセットとなる畑作牧畜型の都市型文明を誕生させた。西アジアの都市文明は5,700年前に誕生したとされているが、著者は、長江文明と同じく6,300年前までさかのぼる可能性が高いとみている。

・気候の冷涼化と長江文明の崩壊

4,500年前の長江文明良渚遺跡は、メソポタミアの都市ウルクに匹敵する100万㎡もの規模を誇っていたが、4,200～4,000年前に衰亡する。良渚遺跡が衰亡したのは大洪水によると考えられてきた。しかし、いちじるしい冷涼乾燥化気候のときなので大洪水は考えにくい。むしろ、司馬遷『史記』に、「かつて長江流域には三苗という人々が住んでいた。それを、炎帝が何度も蹴散らした」とあるので、大旱魃により黄河流域の大汶口文化が衰微し、金属の武器をもつ

た畑作牧畜民が大挙、馬で南下し、稲作漁撈民の長江文明に侵入したからだと著者は考える。

長江流域の苗族の人々は雲南省や貴州省の山岳地帯にイネをもって逃れ、棚田稲作で暮らすようになり、海岸に居た人々はボートピープルとなって台湾や日本に漂着し、稲作を伝えたという（ちなみに、良渚文化期の「刻文付有孔石斧＝鉞」が山形県羽黒町中川代遺跡から出土している）。

3,500～3,200年前に再び気候が冷涼化すると、北方の畑作牧畜民が再び長江中下流域に侵入し、中国は春秋戦国の大動乱の時代に突入するようになる。海岸部に暮らしていた稲作漁撈民は大挙、ボートピープルとなって東南アジアや台湾に逃れ、一部は日本にもたどりついて弥生の水田耕作を伝えたという。

弥生文化の山口県土井ヶ浜遺跡の人骨には抜歯が認められる。漢民族には抜歯の風習がないが、長江中下流域の稲作漁撈民をはじめブンスナイ遺跡の人骨や台湾の古い原住民には抜歯の風習がある。著者は、縄文人の抜歯の風習は渡航したボートピープルの風習が伝えたものと見ている。

・ブンスナイ遺跡の発見とアンコールワット

AD 9世紀頃に、カンボジアのメコン川流域に突然クメール文明のアンコールワット、アンコールトムの巨大な石造寺院が出現する。著者は、アンコールワットが成立する以前の大規模遺跡が近郊に存在するのではないかとグーグル・アースの写真で探したところ、アンコールワットの北西70kmのトレンサップ湖畔のブンスナイ村に直径4kmの奇妙な地形が目にとまった。さっそく調査にのりだして、AD 5世紀頃から営まれた巨大な環濠集落のブンスナイ遺跡を発見する。出土遺物には、湖南省城頭山遺跡と同じ黒陶土器やアンコールワットの壁面にもある太陽紋をもった注口土器ケンディ、中国南部長江流域の鉞山の原料が使われた青銅製品等がある。

著者はこれら遺物から、ブンスナイ遺跡の住民の祖先は、メコン川やサルウィン川上流部の

雲南省シーサンパンナを中心に暮らしていた倭族や貴州省に逃れた稲作漁撈民の後裔がメコン川を下ってきた人々であり、これらの人々が後世のアンコールワット、アンコールトムを建設したと見ている。

・東アジアの肥沃な大三角地帯

地球が温暖だったBC 3世紀からAD 3世紀の間に、漢民族の周囲には長江文明と同じ世界観をもった3つの女王国が成立した。雲南省の滇（てん）王国、カンボジアのブンスナイ王国、日本の邪馬台国である。著者は3つの王国を結ぶ三角形の範囲を「東アジアの肥沃な大三角地帯」と呼んでいる。この東アジアの肥沃な大三角地帯に住む人々は、照葉樹林帯に特有の高床建物に住んで、コメ、魚を食べるだけでなく、餅や納豆、ナレ鮭や魚醤、コンニャク、麴で発酵された食品を食べる、稲作漁撈を生業とする文化要素でも共通性がある。

それがAD240年頃から地球規模で気候が悪化すると、東アジアの肥沃な大三角地帯が再び大動乱に見舞われるようになる。漢帝国は、北方や西方から五胡と呼ばれる異民族の流入により滅亡し、漢民族は中国大陸から東南アジアへ、さらには朝鮮半島を経由して日本列島にもおよぶ大移動を引き起こした。

この大移動によって雲南省の滇王国は滅亡し、日本の弥生文化も終焉して古墳文化に転換し、ブンスナイ遺跡も中国大陸の文化や民族移動の影響をつよく受けるようになった。

第5章 気候環境文明論

四大文明－メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明－には、文字があり、金属器を使用し、都市を構築し、王や神官たちの支配者がいて、ピラミッドや神殿、王宮などの巨大建築物を構築した。

四大文明はいずれも畑作牧畜民が構築した。森とは無縁の砂漠の民の世界観で、森は悪魔と魔女が住む所と見なされて伐採され、乳利用と肉食のためにヒツジやヤギが放牧された。ヒツジやヤギは昼夜の別なく草を食べ尽くしたか

ら、森は砂漠と化して生態系が破壊されてしまった。畑作牧畜民が崇拜するのは天の神様だけ、一神教の世界である。畑作牧畜文明の支配者は自ら労働をすることはなく、戦争で人を殺し、力で他国を支配し、領土を拡大し、自然を支配して、物質的な豊かさを鼓舞することによって王権を権威づけてきたのである。

稲作漁撈民の長江文明は、巨大な都市型集落に王や神官がいても、文字と金属器を持たなかったから文明と見なされてこなかった。また、地球の裏側のマヤ文明やアンデス（インカ）文明等も文字や金属器を持たなかったが、金属器なしでも巨大な文明を構築したのである。

スペイン人やポルトガル人が侵略してくる以前に、共通した世界観を持っていた太平洋の周囲に興った縄文文明、長江文明、クメール文明、マオリ文明、アンデス文明、マヤ文明、ネイティブアメリカン文明を、著者は「環太平洋文明圏」と呼んでいる。いずれもモンゴロイド人種が構築したものである。

稲作漁撈民やトウモロコシ・ジャガイモ農耕民は、乳を利用する家畜は飼わず、森を絶やさず、水の循環を守り、天まで続く棚田・棚畠を勤勉に耕して、自然と大地とともに生きてきた。彼らの世界観は太陽を信仰し、木柱、鳥、山（ピラミッド）、緑の玉を崇拜し、生きとし生きるものの命を崇拜するアニミズムであった。畑作牧畜民が生み出した牧草地やハゲ山が続く荒廃景観とまったく異質の世界観なのである。

BC250～AD250年は、安定した温暖湿潤な気候で、ローマ帝国の繁栄、中国前漢・後漢帝国の繁栄、ユカタン半島のマヤ文明、それに雲南省の滇王国、カンボジアの扶南（ふなん）王国、日本の邪馬台国などが、世界の各地で大発展した。著者はこの時期の繁栄を「新世界秩序文明」と呼んで、先の四大文明に長江文明を加えた「旧世界秩序文明」と区別している。

それがAD250～240年に気候が冷涼乾燥化すると、ローマ帝国はゲルマン民族の大移動により衰亡し、漢帝国も異民族・五胡の流入で崩壊する。日本では弥生文化が終焉して古墳時代に移行する。

・マヤ文明の興亡

中米ユカタン半島にマヤ文明が興ったのはBC1000年頃とされる。エツナ遺跡では、BC600年頃には大規模な灌漑用水路が建設されていた。マヤ文明が発展期に入るのは先古典期後期（BC400～AD250年）で、先古典期の後、AD250年頃からマヤ低地と呼ばれる亜熱帯ジャングルの中で、チikal、カラクルム、コバンなどの都市に王宮が建設され、大発展する。最盛期の古典期後期（AD600～800年）のチikalでは、120m²（ママ120km²か？）の範囲に6万2,000人が暮らしていたとされ、マヤ文明を象徴する大ピラミッドがつぎつぎに造営されて大発展した。

マヤ文明はBC1000年頃の先古典期中期の時代から巨大建築物の建造が始まり、建築材、土木用材、建築に使う漆喰を製造するための燃料などとして、また人口を養うための農耕地として、亜熱帯林が大規模に破壊された。都市周辺から森が消えると森から蒸発する水分の量が減って降雨に影響する。マヤ文明が崩壊したのは、利用可能な水資源と人口のバランスが限界点、飽和点に達した時に気候変動が襲ったからであろう。

気候が悪化して早魃になると、モンスーンの到来が遅れてトウモロコシの種を播くことができなくなり、人々の暮らしに大きく影響する。チチヤンカナブ湖の年縞の分析等によれば、古典期マヤ文明の衰亡は、AD830年と928年を極期とする気候の早魃によってもたらされた可能性が大きい。

3,000年前頃の気候の乾燥化がマヤ文明を誕生させる契機になったが、皮肉にもAD800～920年頃の気候の乾燥化がマヤ文明を衰亡させる要因になったのではあるまいか。「文明を発展させる要因は、同時に衰亡させる要因だった」と、著者はいう。

1524年にマヤ高地に侵略者スペイン人がやって来て、1530年にはマヤ人の本拠地だったアティトラン周辺を制圧する。スペイン人、ポルトガル人、そしてアングロサクソンの人々が新大陸アメリカにやって来た時は、新大陸はまだ

緑の大地だった。彼らは、森を破壊し尽くし、森の中の生きとし生きるものを殺戮して、人間と家畜の王国を作りだす。アメリカ合衆国や中南米諸国が建設されてから500年、多くの森は破壊され尽くされてしまったのである。

・ミノア文明の興亡

クレタ島はBC2000年前まではカシ類やナラ類の深い森に覆われていた。ミノア文明の発展を支えたのは、森林資源を背景とした中近東との交易であった。

ミノア文明はBC1520～1450年のサントリーニ島の大噴火により崩壊したと考えられてきたが、むしろ島内の森林が切られて枯渇したところに、大噴火による気候の冷涼化が直撃した可能性が高い。クノッソス宮殿は木の宮殿であったが、島の森林が伐採され尽くした後に、ヒツジやヤギが放牧されて草を食べ尽くし、生産性が失われた表土を冬雨が流失させた。そのためにクレタ島の人々は飢餓に苦しむことになったのである。

死海の湖底で発見された年縞によれば、サントリーニ島の噴火した後のBC1500年頃からBC1200年をピークに気候が著しく冷涼乾燥し、湖面が47mも急激に低下したという。ミノア文明が滅亡した要因を裏付けるものといえる。

・ローマ文明の領土拡大と崩壊

BC1500年以降続いた冷涼気候がBC250年頃に終わると、今度は温暖湿潤な気候がAD240年頃まで続くようになる。この雨の多い湿潤な気候のために、中近東やアフリカ北部で多くの穀物が生産されたことから、ローマは北緯35度以南の地中海沿岸やアフリカ東部をも領土に組みこんだ。さらにアルプス以北のゲルマンの地まで領土を拡大した。

今は乾燥しているイスラエルの地も、ヘロデ王が活躍した時代は湿潤で、マサダ平原をはじめ砂漠に11の城が作られた。湿潤な気候がユダヤ民族の発展をもたらした。イエスが誕生した年の死海周辺は、年縞の花粉分析の結果、今よりもオリーブやブドウ、それにナツメヤシが

たわわに実る、緑豊かな環境だった。

ローマの都市システムは帝国の人々を魅了し、地中海世界ではミニローマが各地に建設された。都市建設には土木用材や建築材、燃料さらには船材などの木材が必要とされ、盛んに森林が伐採された。こうした初期のローマ人による森林の伐採は、エーゲ海周辺の小アジアやアルプス以北にも及び、森林が破壊され尽くしたことから、その後の気候変動により、ローマ文明は衰亡に向かったのである。

AD100年頃から温暖湿潤だった気候が不安定化する。気候の悪化により穀物生産量が減少し、とりわけ中近東や北アフリカの属州の旱魃と疲弊が税金の減収となって、ローマは国家財政を逼迫させていった。

AD25年に北アフリカでペストが大流行する。以来、AD165～180年にはアントニウスの疫病が、AD189年にはローマで1日に2,000人ももの死者、AD251～266年のキプリアヌスの疫病では1日に5,000人ももの死者が出たといわれるなど、ローマは立てつづけに疫病の災禍に見舞われた。

疫病による人口の激減により、ローマの辺境を守る軍隊も弱体化した。AD235～284年の約50年間はローマが衰亡する時代である。戦争が多発し、それに対処する軍隊と官僚だけが増加し、そのための税金が膨れ上がった。気候の冷涼化は、アルプス以北に住むゲルマン人の暮らしも直撃し、ゲルマン人は怒涛のようにローマ領内に侵入したことから、ローマは衰亡の坂道を転げ落ちていった。

・東アジアの情勢

AD180年頃をピークとする気候冷涼期には、漢帝国では華北から黄河下流域に多数の貧民や流民が生み出され、中国全土にまで黄巾の乱が拡大し、AD220年には後漢帝国が滅亡する。AD240年に気候が冷涼化すると、中国大陸では北方から匈奴、鮮卑などの異民族が乱入して五胡十六国時代の大動乱を迎える。

日本列島でもAD180年頃からの気候冷涼期に倭国大乱が起こる。河内平野の三角州に立地

した現・瓜生堂遺跡などの大集落がつぎつぎに放棄されるなど、東アジアの政治・経済体制の変動の中で勃発した動乱といえる。その倭国大乱のあと、AD200～240年の温暖な気候のときに卑弥呼が擁立されて、邪馬台国が一時的に安定する。冷涼な気候に転じるAD240年頃に卑弥呼が死ぬと、大規模古墳が築造されるようになり、古墳時代へと移行する。

中世温暖期と古代東北の開発

AD645の大化の改新のときは冷涼気候であった。奈良大仏が建立された740年のときは温暖気候であった。中塚良一氏が古文書の記録から復元した京都の風水害と旱魃、巨大地震によれば、地球温暖化とともに風水害の被害が高まったとき、なぜか巨大地震も多出している。

AD920年頃から940年頃までは気候が悪化した時期である。東北ではAD939年の出羽の俘囚の氾濫（天慶の乱）が起こり、連動するように関東では平将門の乱（AD939）が、西国では藤原純友の乱（AD940）が引き起こされる。著者は、古代社会の終焉をもたらした時期はAD920～940年頃の冷涼期にあたるという。延喜15（915）年の十和田カルデラの大噴火による気候の悪化が渤海の滅亡をまねき、935年の白頭山の大噴火が影響して、天慶の乱や平将門の乱、藤原純友の乱が起こったと見ている。

中世温暖期後期は、たびたび気象災害や巨大地震に見舞われる不安定な時代で、庶民はたびたび飢饉に直面した。こうした不安定な時代に、庶民を苦しみから解放するための新しい宗教が天才たち－法然、親鸞、栄西、道元、日蓮、一遍－により創設された。鎌倉仏教である。

なお、AD980年頃からAD1150年頃まで気候が急激に温暖化すると、北欧ではバイキングがグリーンランドに到達し、さらに大西洋を越えてアメリカまで行っている。中世温暖極期が過ぎたAD1180年頃から気候が一時的に冷涼化すると、セルジュックトルコやモンゴルなどの遊牧民が活躍した。モンゴルがヨーロッパまで侵略した。

・ヨーロッパの森林枯渇とペストの流行

10世紀に4,000万人だったヨーロッパの人口は、平原の大森林が切り開かれてコムギやブドウが栽培されるようになると、12世紀以降には5,000万人に、14世紀には7,000万人を突破した。ところが中世温暖期が終わったあと、AD1340年以降に気候が一時的に冷涼化するとペストが大流行し、7,500万人前後だった人口が一気に5,000万人前後にまで大激減した。

ペストは、ペスト菌をもったクマネズミの血を吸ったノミが人間の血を吸うことで人間に感染する。小氷期とよばれる17世紀の段階で、ヨーロッパの森林はキリスト教徒により徹底的に破壊され尽くされた。オオカミは追いつめられて殺され、クマネズミの天敵だったキツネやフクロウも住処が失われたから、クマネズミの棲息環境が広まってペストが大流行したのである。18世紀後半に人々が植林を始めるようになると、ヨーロッパの森林が再生されて、今度はクマネズミの天敵であるドブネズミの繁殖する環境が整えられるようになり、ペストが終息した。

気候が冷涼化した小氷期のヨーロッパではコムギもブドウもとれず、人々の生活が困窮し危機に直面した。キリスト教世界では、その苦しきや不安の矛先をちょっと風変わりな女性に向けて、魔女に仕立て上げて処罰する魔女裁判が横行した。しかし、妖精が住む森とアミニズムが残る北欧では、魔女裁判は流行らなかった。

第6章 森林環境文明論

1万5,000年前に、長かった氷河時代が終末に近づき、温暖な後氷期への過渡期である晩氷期には、マンモス、バイソン、ウマなどの大型哺乳動物が生息する草原が縮小し、ナラやマツの森が拡大してきた。旧石器時代末期の人々は、食用となる大型哺乳動物が姿を消した大草原を捨てて、森の資源に依存する生活を開始した。

しかし、寒の戻りといわれるヤンガー・ドリアスの一時的な寒冷期に森の資源が枯渇すると、再び人々は食料危機に直面する。このとき、森の後退と砂漠化の中にいた西アジアの人々

は、イネ科の草本類のコムギやオオムギの野生種を栽培化することによって、食料危機を乗りきったのである。

ヒツジやヤギの家畜を伴った麦作農耕は、予想外に大量の余剰生産物を産みだした。これまでの大型哺乳動物の肉とは違って、生きたまま飼うことは長期の貯蔵にも適していたから、個人の所有や富の貯蔵の概念が誕生し、人類は物を所有し、他人を支配する喜びを知った。ここに、一部の富める権力者が支配と搾取・殺戮による階級支配の文明「悪魔のプログラム」が始まったのである。

森林破壊の畑作牧畜文明は、麦作農業に立脚した人間中心の自然征服型文明であり、1万年の間に地球を支配してしまった。その結果、21世紀初頭の人類は、破壊された地球環境といかに共存するかという重大な危機に直面することになったのである。

さらに21世紀の前半、森林破壊とともに人類が作りだした地球温暖化という気候変動により水の危機がもたらされ、第五の砂漠化に直面することになろう。2030年には、生きるためになくてはならない飲み水に事欠く人々が20億人以上、最大40億人に達することが予想される。

第五の砂漠化の危機に直面して、人類史的革命をもたらすことができるような技術革新や文明システムを転換する思想が現れるだろうか。そうならない限り、現代文明は崩壊する。

・日本文明は森の文明

日本は森の列島である。これほど豊かな森に恵まれた島は、温帯地域では稀である。周囲を海に囲まれているために日本列島には雨が多く、森の風土を育んできた。日本人はその森林資源をクレタ島のように使い尽くすことなく、持続的・循環的に利用しながら持続性の高い文明を構築してきた。

しかし、この森の列島も過去3万年の間に大きく変化した。地球の気候が変化したからである。(未完)